

1 論点

スカイツリーの時代

新電波塔「東京スカイツリー」(東京都墨田区)が、5月に開業します。634mの高さはタワー世界一。天を突く塔は古今東西、都市のシンボルとして機能してきました。スカイツリーは東京に、どんな意味をもたらすのでしょうか。

下町発展の起爆剤に

橋本 健二 武蔵大教授 (社会学)



はしもと・けんじ 1959年生まれ。東京大大学院博士課程を修了。静岡大教員を経て現職。著書に「居酒屋の戦後史」「格差都市」など。

下町には、タワーが似合う。古くは、浅草の十二階。同じく浅草寺の五重塔。タワーと少し違うが、「お化け煙突」と呼ばれた火力発電所の巨大煙突。いずれも下町の象徴として、庶民に親しまれた。都心とはいえ旧芝区の下町であり、東京のシンボルであり続けてきた東京タワーも、この仲間に入れていい。そしてこの伝統を、東京スカイツリーが受け継ぐとしている。

山の手では権力の象徴

都心や山の手にも古くから高い建造物があったが、その意味が違う。江戸城の天守閣、東京都庁舎、六本木ヒルズなどは、権力の位置する場であり、高みにそびえ立って庶民を見下ろす存在である。都庁舎やヒルズには東京タワーと同様の展望台もあるが、権力者の居城に紛れ込んだような違和感が消えない。

これに対して下町のタワーには、常駐して人々を見下ろす権力が存在しない。内部の空っぽなシンボルの存在、あるいは休日眺望を楽しむ場所である。空間的には高みに位置しながら、人の上に立つことのない非権力性こそが、下町のタワーの良さである。

この非権力性は、もちろん下町そのものの非権力性の反映である。東京には、江戸から受け継がれた山の手と下町の二元構造がある。高台に位

置する西部の山の手が権力と特権階級の空間であるのに対し、海や川に面した東南部の下町は、庶民の空間である。下町には人々の上にそびえ立つ権力がない。だから下町のタワーは、ランドマークや行楽地ではあっても、権力の象徴とはなり得ないのである。

しかし東京の現代史は、下町の凋落の歴史でもあった。関東大震災で江戸以来の古い町並みを失い、その後の都市計画で、工業地帯として近代化の底辺を支えることを運命づけられた。そして東京大空襲で再び焦土と化し、被書の比較的小さかった山の手との格差は決定的になった。

衰退と格差に悩む下町

1980年代以来続く製造業の衰退と経済格差の拡大は、下町の凋落をさらに深刻なものにした。下町は、所得のみならず教育や健康など、あらゆる指標で山の手に大きく引き離されている。高齢化も進み、地域の衰退は著しい。居住の場としての下町には、明らかなマイナスイメージが定着している。

このことが、さらに格差を再生産する基盤になる。山の手では、恵まれた生活環境と教育を通じて、豊かさが次の世代へと継承される。これに對して貧しい下町では、貧困が次の世代の貧困を生む。地域間の格差が、格差の固定化

をもたらすのである。こうした事態を避けるためには、下町にオフィスや商業施設を増やして雇用を拡大するとともに、質の高い住宅を供給し、若年層と新中間階級の定住を促進することが必要だろう。そのための重要な前提条件は、下町のマイナスイメージを変えることである。

定着した地域イメージを变えるのは容易ではない。しかしスカイツリーは、その起爆剤となる可能性がある。かつて東京タワーは、都心から南に外れた下町に人々の目を引き寄せ、その後の湾岸地域の発展に道を開いた。同様にスカイツリーは、都心の東に位置する下町の新たな発展に道を開くかもしれない。下町に魅力を感じていても、訪れるきっかけがなかった人、住むところまで踏み切れずにいた人は少なくないはずだ。これらの人々を誘い込むことが、その第一歩だろう。